



17世紀初めの明の時代に書かれた「菜根譚」は、儒教と仏教と道教の三つの教えを融合し、そのうえにたった処世の道を説いた本として江戸時代に日本伝わり、本場中国よりも、むしろ日本で愛読されてきました。ちなみに「菜根」とは粗末な食事のことで「譚」は談と同じ意味で、苦しい境遇に耐えた者だけが大事を成し遂げることが出来るという意を寓した本とされています。

本書は「前集」と「後集」に分かれ、合わせて360の短い文章から成り立っていますが、その中の一つが「蝸牛角上の争い」です。

石火光中 争長競短 幾何光陰 (石火光中に 長を争い短を競う 幾何の光陰ぞ)  
蝸牛角上 較雌論雄 許大世界 (蝸牛の角上に 雌を較べ雄を論ず 許大の世界ぞ)

意味は

飛び散る花火のように短い人生で白だ黒だと争ってみても、どうなるものか。  
蝸牛（カタツムリ）の角の上のように狭いこの世界で勝った、負けたと嘆いてみてもどうなるものか。  
という事です。

私は人には大きく分けて、過去に生きるタイプの人間と、未来に生きるタイプの人間がいると思っています。過去に生きるタイプの人は自分の過去の実績や、経歴を語りたがる人や、他人の過去の失敗や欠点をことさら大きな事として話したがる傾向が強い人が多い様に思います。

現代社会のIT技術の進化は、不特定多数の何の面識もない人達に、片寄った考えや、間違っただ話も含めて発信する手段を可能にし、その為誤った風評被害も後を断たず、大切な人間関係までおかしになってしまう大きな危険性を持っているのも事実だと思います。

先日、なでしこJAPANのある選手が友人の飲み会へ誘われ、そこで集ったメンバーの中にいた大学生が、その選手が本当に言ったかどうか定かでない事をツイッターで発信し、その選手と監督をはじめ、その学生の大学が謝罪したという出来事がありました。

この件についてある新聞コラムで、目前の大事な人達との人間関係を裏切つてまで、会った事もない不特定多数の人達に、情報ともいえない不確実な話を発信してしまう愚かさを戒めていました。

人は限られた人生を生きて、不完全な者どうしが互いに喜んだり悲しんだり、腹を立てたり笑ったりしながら切磋琢磨して、成長してゆく生き物である事を考えれば、我々は、過去に拘泥して周りを不快にして生きるより、未来に向かって挑戦してゆく生き方を互いに目指してゆきたいものです。

所詮人は、偉いとか偉くないとか、優れているとか愚かだとか、勝ったか負けたかと、互いに競い合ったところで、正に「蝸牛角上の争い」をしているかもしれないという事を考えれば、もっと我々の生き方の根本を考え直す時代の様な気がします。

今から400年も前に書かれた「菜根譚」から改めて学びたいものです。